

# 隨泉寺寺報

平成27年（2015年） 3月号 第534号

TEL.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 真宗寺副住職 小川智行師

講題 『たまわりもの』

## ■彼岸会について

彼岸会は日本固有の行事で、古くから行われてきました。3月と9月の春分・秋分の日を中心とし、それぞれ前後3日間ずつ、各1週間を通して勤まる法要です。聖徳太子は仏教の信仰厚く、十七条憲法で『篤く三宝（仏・法・僧）を敬うべし』として仏教信仰を勧めておられます。これが彼岸会の始まりといわれています。お彼岸には多くの方々が亡き方々を偲び、お墓参りをされるのですが、そこで私達が見失ってはならない大切なことがあります。それは、お墓参りを縁として、そこにお骨を残して逝かれた方の往かれた先（いのちの行方）、つまり浄土に思いを寄せると共に、またこの私のいのちの行方（帰る世界）をみつめ、浄土への道のりをたずね、聞き開くということです。私たちの先祖の方々が、お彼岸を『み教えを聞く期間』として大切にしてくられた理由もまたここにあると思われまます。

## 3月の法座予定

- 3月 2日……………本部役員会
- 3月 8日……………掃除 平原上第1
- 3月 12日 昼席午後1時より……………瀬野川仏婦連合会記念講演会
- 3月 15日 朝席午前10時より……………春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日 昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 4月 2日 午後4時より……………門信徒会本部役員会 花見

## ☆ インド紀行(8) 若院

[3月]

3月3日は、早朝からの霊鷲山の登山と、前正覚山の登山とで朝から体力を使い果たしてしまったので、バスの中ではぐったりと休んでしまいました。。。



三時間ぐらいバスで移動し、お釈迦様は正覚成道（悟りを開かれた）の地であるブダガヤへ到着しました。

ブダガヤで 2002 年に世界遺産に登録されていて世界中から参拝者が絶えない仏蹟地であります。ですので、セキュリティーも厳重で入口では荷物検査も行われていました。現地ではマハーボディー寺院とも言われている高さが 52m もある大塔があります。その横にお釈迦様が正覚成道された菩提樹と金剛宝座（台座）が安置されています。

余談ですがこれは私たち日本人にとっては恥ずかしい話ですが、以前この金剛宝座に「我こそが釈尊の生まれ変わり」と言わんばかりに神聖な場所である台座に座った日本人がいたそうです。ですので現在は厳重な柵が設けられています。（その日本人とは日本を震撼させたオウム真理教の教祖麻原彰晃だそうです。）



その菩提樹の前で沢山の人がお勤めをされていました。私たちもそこでお勤めをされてもらいました。お釈迦様が悟りを開かれた場所で素晴らしい空気の中で何ともありがたい気持ちでお参りさせていただき、とてもありがたかったです。

大塔の周りには五体投地という頭と両手、両ひざ、お腹を地面につけて行うという礼拝をされている方がたくさんいらっしゃいました。

毎日このブダガヤにきて朝から日が暮れるまで五体投地をされる方もいらっしゃるとお聞きし、一心に礼拝を行うそのお姿を拝見しお釈迦様への熱い思いを感じさせていただきました。また 13 世紀にイスラム教徒がインドへ侵略して来た時にインド中の寺院や仏像を破壊していきました。その時にインドの仏教徒た



ちはこの場所は決し壊されたはいけない、との思いからこの大塔を砂で覆いつくし山に見立ててこの寺院を守ったそうです。それから発掘されるまで 600 年間は土に埋もれたままになっていたそうです。52m もある大塔を土で覆い尽くして山にしてしま

うという作業がどれほどのものであったのか、その事を考えてみると仏教を大切に守っていた当時の仏教徒に本当に頭が下がりました。

## ☆ 御礼

永代経懇志 金 貳百万円 観心院釋正護 中本健一殿 遺言にて

## ☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

### 一浄土真宗一口法話一 3月

(森ひな)

「たりき たりきとおもうていたが おもうたところが みなじりき」

戒律を守り、自力の修行をして悟りを開く道はむずかしいけれども、浄土真宗は、他力だから、易しいと思っっている方がいます。これは、半分当たっていて、半分はずれているように思います。確かに、自力の修行は易しくありません。でも、浄土真宗は本当に易しいのでしょうか。

誰でも救って下さるのだから、怠け者でよいとか、好き勝手にしてもよいというのでは、阿弥陀如来さまを自分の都合に合わせて、利用していることになります。私が、阿弥陀如来さまに救われるほかに方法のない危ない人間、恐ろしい人間であると気付かされる時、自分を当てにして生きるのではなく、南無阿弥陀仏を当てにして生きる道が開かれます。私が、佛様を選んで、阿弥陀如来さまに頭を下げるのではなく、おのずから、頭が下がるのです。そこから、この世を、御同朋と手を取って歩ませていただきたいものです。



浄土真宗の教えは、この世の常識をひっくり返すものであるというのが私の持論です。今日の日本では、人々がだんだん賢くなってきたように感じられます。科学技術の進歩は申すまでもなく、自分や自分の組織団体の利益を計ることについて、更に、都合が悪くなると、責任を組織に押しつけて逃げる姿にもよく現れています。でも、このような賢さでは、生きる意味や喜び、いのちの尊さはわかりませんし、社会も乱

れます。

親鸞聖人やその師匠、法然聖人のお言葉からわかるのは、阿弥陀如来さまの智慧に照らされて、受け止められた自らの愚かさです。自らの愚かさ気付くことは、実は、本当の賢さではないでしょうか。そこから、自分のいのちと他のいのちを等しく見ることを知らされ、御同朋御同行と支え合って生きる道が開かれます。

### 3月 カレンダー法語

東井 義雄師

### 「俱会一処」 大いなるであいの世界

「生」と「死」を超え、血のつながりの「有」「無」をも超えて、俱に（ともに）一処（ひとつところ）に会うことのできる世界、これを如実に教えてくれる作文があります。これは、ある製薬会社が、「母の日」を記念して、全国の小学生たちから「お母さん」という題の作文を募集したときの人選作品です。

『二人のおかあさん』 千葉県 四年

「きょうはおかあさんのお命日よ」としらせてくれる今のおかあさん。おぶつだんにいつもお花をそなえてくれるのもこのおかあさん。

「おかあさん、ぼくはしあわせなの、だからおかあさんのお命日まで忘れてしまふんです。わるいぼくですね」といって、こんどもおわびをしたんです。

なくなったおかあさんは、いつもぼくとねながら、「おとうさんは、いつになったらふくいんするのでしょうか、ね、信ちゃん」といって涙ぐんでいた。

そういうおかあさんの顔がうかび、おぶつだんにむかって、ぼくはうっかり「おかあさん」と呼んでしまった。

すると、お勝手の方で「はい」と返事がして、ぼくはあわてた。おかあさんの姿があらわれて「なあに？」といわれても返事ができなかった。でも、むりにわらって「何かいいものない？」という、「おまちなさい。おかあさんにおそなえしてからよ」といって、草もちがそなえられた。

そして、おぶつだんにむかって、おかあさんは、ながいながいおまいりをしていいる。ときどき「信綱ちゃんが……」「信綱ちゃんが……」と、ぼくのことをおぶつだんのおかあさんにお話ししている。

それをみているぼくの目に、涙のようなものがうかんできて、ぼくの目はかすんでしまった。おかあさんは、そんなこと、なんにも知らないようすで、おぶつだんにお話ししている。

ぼくは、おぶつだんの中のおかあさんと、その前でおまいりしているおかあさんをいろんなふうを考えてみた。おとうさんやぼくだけでなく、なくなったおかあさんにまで。ほんとにぼくはしあわせだ。

夕飯のとき、このことをおとうさんに話したら、「おまえがかわいいから、おかあさんは、おまえのほんとうのおかあさんになろうとしているのだよ」といった。

ラジオがやさしい音楽をおくってくれている。テーブルにはお命日のごちそうがならんでいる。

おとうさん、おかあさん、ぼく、おぶつだんの中のおかあさん。ほんとにぼくはしあわせだ。「おかあさん、ながいきしてね」といったら、そばにいたおとうさんはわらっていたけど、ぼくは、なくなったおかあさんが生まれかわってきた、それが、今のおかあさんだと考えて、ほんとうは、おかあさんのお命日を忘れようとしているのです。というのです。

これこそ「俱会一処（ともに一つところ＝お浄土）に会う世界」ではないでしょうか。

この「大いなるであいの世界」の中にこそ人間のまことのしあわせがあるのではないのでしょうか。ところが、私たちはこの世界を今求めているのでしょうか。

「であい」の方向にではなく、「我」「他」「彼」「此」と互いに自己を主張しあい、責めあい、壊しあう方向に進んで、その愚かさ目を覚まそうとしないでいるのが、今日の私たちのあり方ではないのでしょうか。

